

## 古期アイルランド語の諸特徴と類型

— 4 大グロース (分ち書き) に見られる  
形態統語的特徴と類型的特徴を中心として —

本 城 二 郎

### 1. 序論 (古期アイルランド語の概要 — 特異な言語的特徴とグロース資料 —)

最古のケルト語は、最も多く現存する資料を残す古期アイルランド語(OIr. <sup>※1</sup>)の中に認めることができる。中でも、5世紀以降にアイルランドから大陸へと渡った僧侶たちがラテン語文献テキストに残した数多くのグロース (分ち書き) がこの言語の特徴を最もよく伝えている。南ドイツ、スイス、イタリアの修道院に残された所謂4大グロースがそれで、8世紀半ば以降に書かれたものとされる。1語群が1プレスユニットを成す1形態素として、時には1形態素が1文を表示するという書記的音声的特徴および文要素分割/抱合形式、接中辞挿入や屈折前置詞や前置詞+動名詞による従属句構文などに代表される形態統語的特徴、VSO言語(現代アイルランド語)へと移行する以前のV言語としての類型的特徴など、グロースからは古い欧州語の特異な一面の反映が窺える。本論では、最も体系的な言語分析がなされたML. <sup>※2</sup>(ミラン・グロース)と最古のWb. (ヴェルツブルグ・グロース)を中心に、Tur. (トゥリーニ・グロース)、SG. (聖ガル・グロース)も参照しつつ、諸例の観察を通じて、ケルト語の最古層と見なされる古期アイルランド語の諸特徴と類型の抽出に迫る。印欧言語学の分野では極めて重要とされるものの、とりわけ(本邦では)未だ寡少なケルト言語学研究への一助となれば幸いである。

### 2. 古期アイルランド語の全体的特徴と4大グロース資料

#### 2. 1. 古期アイルランド語の全体的特徴

古期アイルランド語全体に観察される形態的特徴と統語的特徴は、以下の通りである。

#### ●名詞類の豊富な曲用/屈折(語形変化):

- ・名詞/限定的形容詞—常に後置—/定冠詞(不定冠詞は不在)/指示代名詞:  
性・数・格の変化(叙事的形容詞は主語と性の一致)
- ・人称代名詞: 前倚的 vs. 強調的: /接中・接尾人称代名詞/所有代名詞/強調小詞/  
人称・数の変化
- ・数詞: 基数詞1~10は性・格の変化、その他は名詞的变化/序数詞は形容詞的变化

#### ●動詞の多様な活用(語形変化):

- ・基本的には、他の欧州語と同様、人称・数・時制・態・法による活用(語形変化)

- ・ 主な動詞には絶対形と連結形があり、前者（絶対形）は単独で、後者（連結形）は前接辞 *ro/no* や否定/疑問小詞や接続詞の後での使用
- ・ 3つの人称（1・2・3人称）、3つの数（単・複・双数）、5つの時制（現在/未完了/過去/未来/（動作可能性表示の）二次的未来）と（現在/過去/未来における動作完了表示で、主に *ro/ad*-など前接辞付加の）完了、3つの法（直説法/接続法/命令法）、2つの態（(PIE Middle 中動態が起源の Deponent つまり)異態動詞を含む能動態/受動態）、それに加えて特別な（単純動詞の直説法/接続法現在・過去・未来それぞれの 3sg/1pl/3p 絶対形に対応する）関係詞形があり、しかも動詞の語幹には5つのタイプ（現在・接続法・未来・能動過去・受動過去語幹）、活用の異なる2種類の動詞（G.類似の強変化動詞/他品詞派生の弱変化動詞）が存在し、極めて複雑な様相を示す活用形が存在

● 分詞・不定詞の不在と動名詞（または動詞的名詞）の頻用：

i. 不定詞構文の役割をする動名詞：*do+vn*(動名詞構文)

動名詞の目的語は属格、主語は主格で、いわゆる E. *for-to* に相当する。

*pv(neg.)+v n(gen.) do+vn*(動名詞構文) *art+n(gen.)*

*Niba fir* \*<sup>3</sup>...*Cet do rainn na mucce.... -SMMD* \*<sup>2</sup>9.3-

(ケットがその豚を切り分けるのは正しくない)

*art+n(nom.)+do+vn*(動名詞構文)

..., 'no in mucce *do rainn*.' -SMMD 11.1- (豚を切り分けること)

ii. 補語または従属構文の役割をする動名詞：*do+vn*(動名詞構文)

*art+n(nom.)+do+vn*(動名詞構文)

*Is bés leo-som in daim do thúarcuin.* -Thureysen G. \*<sup>2</sup>445-

(雄牛が脱穀をするのは彼らの習慣だ<雄牛による脱穀は…)

iii. いわゆる進行形（つまり継続相）表示役割をする動名詞：*oc+vn*(動名詞構文)

*oc+vn*(動名詞構文) *pp+n(dat.) +n(gen.)* *adv.*

*Oc techt iar*\*<sup>3</sup> *fraichrud Midi síar, is and do·n·ārlaic*\*<sup>3</sup>.... -SMMD 20.3-

(ミースの荒野に沿って西の方に行こうとしていて…飛び降りた)

● 屈折前置詞（または活用前置詞）：

前置詞+接尾人称代名詞の1語結合	Sg. 1p	2p	3pm.n./f.	Pl. 1p	2p	3p
<u><i>oc</i></u> (>Mod.Ir. <u><i>ag</i></u> ~(の処)で) +dat.		<i>ocum/ocom·ocut·occo/occi·ocunn·φ·occaib</i>				
<u><i>do</i></u> (>Mod.Ir. <u><i>do</i></u> ~へ) +dat.		<i>dom·duit·dó/dí·dún·dúib·dóib</i>				
<u><i>la</i></u> (>Mod.Ir. <u><i>le</i></u> ~と//には) +acc.		<i>lem·lat·leiss/lee·linn·lib·leu/léo</i>				

その他の主な屈折前置詞とそれらの屈折（/活用）は、以下の通りである。

<u><i>for</i></u> (>Mod.Ir. <u><i>or</i></u> ~の上に) +dat.	<i>form·fort·for/fuiri·fornn·fuirib·foraib</i>
~の上へ +acc.	<i>foir/forrae</i> <i>forru</i>

dí (>ModIr. de ~から[原因]) +dat. dím(-sa)-dít-de/dí-díb-díb

ó/úa (>ModIr. ó ~から[以後]) +dat. úaim-úait-úad/úadi-úain-úaib-úadib

Boi cú occo. (彼は犬を飼っていた<彼には犬がいた) -SMMD 1a.2-

cf. ModIr. Tá airgead aige. (彼は、お金を持っている<彼にはお金がある)

Atá biad lat cenco·n·esarra. (あなたには、...、食べ物がある) -SMMD 3.3-

●V-S-0 語順： —2. 2. 1 および3 で言及—

●非人称受動形の頻用：

新しい(イタリアック諸語、トカラ語、ヒッタイト語と同じ) *r*-受動形の拡大タイプで、3人称単数・複数形のみ存在し、1、2人称形の表示は接中代名詞挿入による。

do·berar ((彼/彼女/それが)運ばれる) do·bertar ((彼ら/彼女/それらが)運ばれる)

<do·beir (運ぶ、連れて行く) no·m·berar ((私が)運ばれる<(私を)運ばれる)

do·ratad (与えられた) do·rat<do·beir (与える) の完了形+ad (3単現形語尾)

ro·leced ((φが)放り出された) <leicid (放り出す) の過去形 (3単形)

☞<sup>※3</sup> 非人称受動形 (3人称単数接中代名詞の挿入なし)

●存在動詞 *a·tá* (ある) +斜格タイプ所有構文の文法化：

i. 存在動詞 *a·tá*+与格接中代名詞 (:意味主語) 挿入による所有構文：—低頻度—

Lat. *est mihi* (/Gr. *estí moi*) タイプ (=E. *there is to me*)

... ocus rog·bía lind ocus biad ocus ascada -SMMD 4.6-

(彼らは、飲み物と食物と贈物を受け取るだろう<彼らには、... があるだろう)

ii. 存在動詞 *a·tá*+屈折前置詞 (*la*+対格/*oc*+与格) による所有構文：—汎用—

R. *U meña máslo* タイプ (=E. *there is ~ with/at me*)

Atá biad lat cenco·n·esarra. -SMMD 3.3-

(あなた(の処)には、食べることはないが、食べ物がある)

●関係詞の不在と動詞関係詞形の存在：

結合機能を担う V(SO)語順の要件による関係構文が頻用されている。

bruden ro·boí i nHérinn (アイルランドにあった旅館) -SMMD 1b.8-

動詞関係詞形 (3sg/3pl/1pl) による結合は、現在形で主語か目的語にのみ可能。

cech mac gaibes gaisced acaib -SMMD 9.6 (あなた達のうち武器をとる全ての息子)

先行詞が関係節の主語と一致する場合、前接辞 *no/ró* や否定小詞 *ní* (= *ní is*) などに後続する要素の緩音化/鼻音化が義務的となる。

In fer no·thēged (出て行った男) -SMMD 1b.11-

☞ 緩音化: thēged <téit (行く)

2. 2. 抱合(要素分割)形式

古期アイルランド語に固有な形態統語的特徴として、代名詞目的語による2種の抱合形式(動詞内抱合と前置詞句内抱合/屈折前置詞)の存在が確認されている。

2. 2. 1. 動詞内抱合と接中代名詞挿入

古期ケルト語においては、動詞文頭 (V-S-O) 文タイプが文語順の基本形である。ここでは、主語 (S) は、通例、動詞語尾で表示されるが、目的語 (O) が対格代名詞の場合、接中代名詞として動詞内に挿入/抱合され、単一要素動詞 (V) 文タイプとなる。

v n(=S) n(=O)

**Sligid Nial slogu.** (ニアルは大軍を打ち負かす) -Ériu XII, 214-

pv+pn(=O) +v(S)+(emph) pn *ij*+n(voc)

**Du·m·gne·sse, a dáe.** (神よ、あなたは私を造り給う) -Ml.42<sup>a</sup>8-

(=*dumgnesseadáe*)

☞ 上記はいずれも Doi(1998), p.17 よりの引用例

バリエントとしては、動詞文末 (S-O-V) 文タイプが従属用法の動詞の場合、主に古文獻において観察されている。動詞文末位置は、すでに Wachernagel(1892)の印欧語語順に関する所説で論じられ、アイルランド語の古い文献 (詩や法令文) に代表される古期ケルト語の古層でも定動詞文末 (O-V 型) の存在が知られている。

pv+pn(=O) n(=S) v

☞ Doi(1998), p.18 よりの引用例

**Nim aēs n·argart.** (齡は私に妨げとはならなかった) -Meyer,misc.Hib.42-

## 2. 2. 2. 前置詞句内抱合と接尾代名詞挿入 (=屈折(活用)前置詞)

古期アイルランド語は、前置詞特に接尾人称代名詞/所有代名詞付前置詞を頻用する。その結果、緊密に結合した前置詞句全体は、(接尾代名詞の) 人称・数により変化 (屈折または活用) する 1 要素 (1 語) となる。いわゆる屈折 (/活用) 前置詞であり、以下の用法が確認されている。

### i. 繫辞 (*is*) や形容詞に後続する接尾人称代名詞付前置詞

c a *do*+pn

☞ 下記全て Lehman(1975), p.61 よりの引用例

**is inse nduit.** ((それは、)あなたには困難です) -Wb.5<sup>b</sup>28-

### ii. 存在動詞 (*atá*) とともに所有構文を構成する接尾人称代名詞付前置詞

v n(=O) *oc*+pn(=S)

**Boí cu occo.** (彼には、犬がいる/彼は、犬を飼っている) -SMMD 1a.2-

### iii. 1 文中に連続する接尾人称代名詞付前置詞

v+pn(=S) n *la*+pn+pn(emphatic) *fri*+pn

**Táthut airle lim·sa fris.** (それについては、あなたには私から助言がある/それについては、あなたは私から助言を受けている) -SMMD 3b.14-

## 2. 3. 4 大グロース資料とその形態統語的諸特徴

### 2. 3. 1. グロース資料の分析法

グロースについては、特にその原典資料からのテキスト分析が重要となる。なぜなら、分ち書きのスタイルとしては、1 プレスユニットが 1 綴りで表記されているのが慣習的であり、それが現存するグロース資料に広く観察されるからである。ここでは、先行研究 (Doi(1998)の Ml.分析<sup>\*4</sup>、Lehman(1975)の OIr.ハンドブック) を参考に、

特に語類表示の詳細を伝えるべく筆者による修正を加えた分析法を以下に試みる。

Ml.51<sup>g</sup>: .i. conaconbethleuetir. -Ml.35<sup>c</sup> ☞ Doi(1998), p.27 よりの修正引用

(つまり、彼らはそもそもそれを所有してはならないのだ)

cn +pv + v pp+pn adv  
 =.i. con·na·(con)·beth leu etir ☞ 3リズム単元(結合体)からなる動詞(V)を核とした発話文  
 つまり ~でないこと ~であるべきだ 彼らには 共に

## 2. 3. 2. 4大グロース資料の実例と解釈(筆者による日本語訳)

以下に、Lehman(1975)所収の全グロース資料に番号と筆者訳(全訳または一部訳)を加えたものを用例として提示する。

Wb.12<sup>c</sup>29: ① nī ar formut frib·si as·biur·sa in so.

(私がこう言うのは、あなた達への嫉妬からではない)

Wb.32<sup>a</sup>21: ⑥ at féchem dom.

(あなたは、私の借主です/私に恩を感じています)

Ml.51<sup>g</sup>: ⑧ isin nūall do·n·gniat hō ru maith for a nāimteá remib..

(彼らが目の前で敵を打ち負かしたときに上げた叫び声に)

Wb.12<sup>c</sup>22: ⑨ ro·cluínethar cách in fogur & nícon fitir cid as·beir.

(皆はその音が聞こえ(るが)、なんと言っているか分からない)

Wb.10<sup>d</sup>23: ⑭ mað ar lóg pridcha·sa, .i. ar m'ētiuth & mo thoschith, ní·m bia fochricc dar hési mo precepte.

(もし仮に私が説教しているのが対価のため、つまり衣服や食べ物のためだったとしたら、私は説教後に報酬を受け取らないだろう)

Wb.29<sup>a</sup>28: ⑳ biit al·aili and ro·finnatar a pecthe resíu do·coí grád forru; al·aili is íarum ro·finnatar: berir dano fri laa brátha.

(通例、叙階される前に罪が見つかる者がいる。後になって見つかる者もいる。つまり、後で、最期の(審判)日に言及がなされる)

## 2. 3. 3. その形態統語的諸特徴

以下の6つの文タイプが抽出され、それぞれの形態統語的特徴が明らかとなった。

### ●名詞文タイプ:

i. 繫辞 *is* (V) + (動) 名詞/形容詞/副詞/前置詞+名詞/等 (c) + 従属節 (s):  
 2要素述語判断文/強調文 (=E. *it is ~ that .../for~to*)

① nī ar formut frib·si as·biur·sa in so. -Wb.12<sup>c</sup>29-

(私がこう言うのは、あなた達への嫉妬からではない)

pv	pp( <i>at</i> +dat)	n(dat.)	pp( <i>fri</i> +pn·pn(emph.))	vdeut1sg.pres.)·ptc(emph.)	art.+ptc(emph.)
nī	ar	formut	frib·si	as·biur·sa	in so.
~でない	~のゆえ	嫉妬	~への	私が言う (<as·beir(彼が言う))	それを

類例：③Wb.14<sup>d</sup>26: *is i persin Crīst d-a-gníu-sa sin* (私がそれを成すのは、キリストという人物に対してです)： is+前置詞(*d*)+名詞、④Wb.21<sup>c</sup>19: *is oc precept soscéli attó*(私が説いているのは、神の福音です/私は、神の福音を説いているのです)： is+前置詞(*oc*)+動名詞 (：進行相)、⑤Wb.27<sup>c</sup>22: *is airi am cimbid-se* (私が捕囚なのはこのためです)： is+屈折前置詞(*ar*)の中・3・単 (：副詞)、⑦Wb.5<sup>b</sup>28: *is inse nduit* (あなたにとっては、難しいです)： is+形容詞+屈折前置詞(*do*)の2・単、⑩ML.112<sup>b</sup>13: *is demniu liunn* (我々にはより確かです)： is+ (比較級) 形容詞+屈折前置詞(*la*)の1・複 (：判断者=意味主語)、⑮Tur.110<sup>c</sup>: *ba bés leu-som* (彼らには(次の)習慣があった)： is (過去) + 名詞+屈折前置詞(*la*)の3・複、⑯ML.107<sup>a</sup>15: *bid sochaide atrefea induit-su* (大勢の人があなたのところに住まうだろう)： is (未来) + 名詞 (：意味主語) + 従属節(動詞+屈折前置詞(*in*)の2・単) /後半：同一タイプ、⑰Wb.29<sup>d</sup>27: *ní mebul lemm cia f-a-dam* (私は、それが恥だと私は思わない/私にはそれが恥ではない)： is (否定) + 名詞+屈折前置詞(*la*)の1・単 (：判断者=意味主語)、⑱ML.112<sup>b</sup>12: *is toisigiú ad-ciam teilciud* (我々がそれを投げる/打ち込むのを見る方が早い)： is+ (比較級) 形容詞+従属節 ([知覚] 動詞+動名詞)、⑲ML.93<sup>d</sup>14: *is ed as-berat-som, is gāu dún-ni ...* (それは、彼らが喋っていることで、我々がキリストについて話していることは嘘です)： is+代名詞+従属節, is+ (属性) 名詞+従属節、⑳ML.17<sup>c</sup>7: *is laigiú intí ara-foim indaas intí hō n-eroīmer* (受け取られた者より(それを)受け取った者のほうがそれ(=権力)は小さいのだ)： is+ (比較級) 形容詞+従属節 (vi. 抱合 動詞(接頭辞(*pv*))+接中代名詞(：目的語 O)+動詞 v) V)

ii. 繫辞 *is* (V-S) + 名詞 (：補語 C)：2要素述語属性文

(=E. *I'm /You're /He(/She/It)'s ~*)

⑥ at féchem dom. -Wb.32<sup>a</sup>21- (あなたは、私の借主です/私に恩を感じています)

cp	n(nom)	pp( <i>do</i> )+pn(1sg)
at	féchem	dom.
あなたは～だ	借主	私への (<do(～)+m(私)

類例：㉑ML.82<sup>a</sup>7: *ní dēnti dūib-si anīsín* (あなた達はそれをすべきでない)： is (否定) + 法述語+屈折前置詞(*do*)の2・複 (：意味主語) + 代名詞 (：意味目的語)：—バリエーション—

iii. 前置詞句(前置詞+名詞) Adv+関係節：1要素無動詞文(=E. *In the cry that ...*)

⑧ isin nūall do-n-gniat hō ru maith for a nāimteá remib. -ML.51<sup>c</sup>g-

(彼らが目の前で敵を打ち負かしたときに上げる叫び声に)

pp+art(dat.sg)	n(dat.sg)	pv.nazal.rel.v
isin	nūall	do-n-gniat
その～(の中)で	叫び声	彼がする/作る～

類例：㊸Ml.82<sup>a</sup>7: ní dēnti dūib·si anāsin (あなた達はそれをすべきでない)：法述語  
 + 屈折前置詞(*do*)の2・複 (：意味主語) + 代名詞 (：意味目的語)

●動詞文タイプ：

iv. 動詞 (V) + 名詞 (：主語 S) + 名詞 (：目的語 O)：3要素動詞行為文  
 (=E. *Everyone hears* ~)

㊸ ro·cluine<sup>h</sup>thar cách in fogur ...-Wb.12<sup>c</sup>22- (皆はその音が聞こえ(るが)、...)

vdep.(3sg.pres)	pn	art+n(acc.)	pp(re)+pn(3pl)
ro·cluine <sup>h</sup> th	cách	in fogur	
聞く/聞こえる	皆	その 音を	

類例：㊸Wb.24<sup>a</sup>38: nī epur a n-anman sund. (私は、ここで彼らの名前を言わない)  
 ㊸Wb.15<sup>b</sup>28.前半: a mbás tiagme·ni do·áirci bethid dúib·si (我々が至る死は、あなた達に生をもたらす)：名詞 (：主語 S) + (他) 動詞 (V) + 名詞 (：目的語 O) — SVO バリエント—/後半: i タイプ、㊸Wb.11<sup>a</sup>4.前半: rethit huili (皆は走り/走る)：(自) 動詞 (V) + 名詞 (：S) —VS バリエント—/後半: i タイプ、㊸Wb.6<sup>c</sup>7: léic úait inna bíada milsi (その甘い食べ物を手放しなさい)：(他) 動詞 (V) + 名詞 (：目的語 O) —VO バリエント—：命令文、㊸Ml.69<sup>a</sup>21: co n·epred: ‘...’ (それで彼は言っています「...」)：(自) 動詞 (V-S) —V (-S) バリエント—、㊸Ml.67<sup>d</sup>14: ru·n·d gabsat ar ndā thoib̄ (2つの側面があった/を得た)：(他) 動詞 (V-S) + 名詞 (：目的語 O) —V(-S)O バリエント—、㊸Mb.13<sup>b</sup>12: cid dia léicid cundubairt for drēcht ūaib̄? (何ゆえあなた達の一部は疑いを捨てるのか?)：(他) 動詞 (V-S) + 名詞 (：目的語 O) + 名詞—屈折前置詞(*do*)の2・複 (：意味主語)、㊸Ml.32<sup>c</sup>15: ní eperr immurgu frin·ni (実際我々に対して言うてはいない/言われてはいない)：(受動) 動詞 (V) + 屈折前置詞(*fr*)の1・複 (：意味主語?) —V バリエント—、㊸Ml.54<sup>d</sup>7: ro·lil dīm mernigde (私から祈りが続いた)：(自) 動詞 (V) + 屈折前置詞(*d*)の1・単 (：副詞句) + 名詞 (：主語 S) —V-S バリエント—、㊸Mb.18<sup>d</sup>3: immu·n·cūalammar (我々はお互い(の声)を聞いた)：(自) 動詞 (V-(S)) —V(-S) バリエント—、㊸SG.31<sup>a</sup>6: di airisin do·ratad foir a n·ainm sin (歴史から彼に名前が与えられた/彼は名付けられた)：(受動) 動詞 (V) + 屈折前置詞(*for*)の3・単 (：意味主語?) + 名詞 (：主語 S) —VS バリエント—、㊸Ml.82<sup>a</sup>7: atá nech dubar ndeicsin (誰かがあなた達を見ている)：(自) 動詞 (V) + 名詞 (：主語 S) + 屈折前置詞(*do*)の2・複 (：副詞句) + 動名詞 (：補語) —vSV バリエント：進行相—、㊸Ml.120<sup>d</sup>2: is samlaid du·érglas Asnaib̄ dūlib̄ (～の要素から探し出された)：(受動) 動詞 (V-(S)) + 屈折前置詞(*as*)の1・複 (：副詞句) —V(-S) バリエント—、㊸Wb.10<sup>d</sup>5: cani epir? (彼は喋っているんだな?)：(自) 動詞 (V-(S)) —V(-S) バリエント—

v. 動詞 (V) + 名詞 (：主語 S)：2要素動詞存在文 (=E. *There is/exists* ~)

/動詞 (V) + 名詞 ( : 主語 S : 意味目的語 o) + 屈折前置詞 ( : 意味主語 s) :  
2要素動詞存在文=所有文

㉓ biit al-aili and ro·finntar a pecthe ... -Wb.29<sup>a</sup>28-

(通例、... 罪が見つかる者がいる。...)

v-exist..(3sg-pres)	pn		cj	v(3sg-pres-pass.)	art. N(nom.pl)
biit	al-aili	and	ro·finntar	a	pecthe
通例... がいる	誰か他人	~そこで	見つかる/見つけられる	罪が	

vi. 抱合動詞 (接頭辞(pv)+接中代名詞( : 目的語 O)+動詞 v) V+名詞 ( : 主語 S) :

3要素動詞抱合文 (=F. *Je t'aime* タイプ)

Ním déni ~. (彼は、私を~させない) (=E. He doesn't make me ~)

⑭ ...., ní·m bia fochricc dar hési mo precepte. -Wb.10<sup>d</sup>23-

(私は、説教後に報酬を受け取らないだろう)

pte(neg.)+pn	v-exist..(3sgfut.)	n		cj	pn(poss.)	vn
..., ní·m	bia	fochricc	dar hési	mo	precepte.	
ない 私に	あるだろう	報酬	~の後	私の	説教(をすること)	

類例: ㉒ Wb.10<sup>d</sup>5: *náte! at-beir.* (いや、(彼は)それを話しているんだ) : 抱合動詞 (接頭辞(pv)+接中代名詞( : 目的語 O)+動詞 v) V-(pvOv)V バリエント一、㉓ Wb.20<sup>a</sup>10:

*ní nach aile ass-id-beir.* (他の誰もそれを話していない) : 抱合動詞 (接頭辞(pv)+接中代名詞( : 目的語 O)+動詞 v) V-(pvOv)V バリエント一、㉑ Ml.93<sup>d</sup>14: *indas*

*as-n-da-fiadam-ni du-n-da-rigni* (彼(=キリスト)が如何にその行いをしたのかと我々が(それを)語るように) : 抱合動詞<sub>1</sub> (接頭辞(pv)+接中代名詞( : 目的語 O)+動詞 v) V-(pvOv)V バリエント一+抱合動詞<sub>2</sub>

3. 古期アイルランド語の類型: 総合的 V タイプへの傾向

OIr. (古期アイルランド語) にはいくつかのバリエントが存在するものの、V(P)タイプが主要で頻度が最も高いことが古文献 (例えば *MLGL*) の分析<sup>\*3</sup>から明らかにされている。纏めると、以下のタイプ分布が認められる。(本城(2015)参照)

OIr. 3種の語順タイプの併存:

V(P)-S-O タイプ (S 名詞かつ O 名詞の場合: V(P)SO) : /低頻用で稀/

V(P)-O タイプ (O 接中代名詞の場合: V-o (P)S)

(S 動詞人称語尾(φ)の場合: V(P)O) : /低頻用/

V(P)タイプ (O 接中代名詞かつ S 動詞人称語尾の場合: V-o (P)) : /頻用/

☞ 接中代名詞による抱合タイプの一つ

次に、Kurzová による SAE (標準均一欧州語) に基づく C (中心域) -P (周辺域) 類型論<sup>\*5</sup>の (いわゆる地域言語類型論) の立場に立てば、語順以外にも多様な文法現象のタイプ分布が可能となる。それに従えば、具体的には、OIr. (古期アイルランド語)



における特異な文法現象の多くは、SAE（標準均一欧州語）のP（周辺域）に属する現象に対応し、以下の5つの周辺タイプ（P）を構成している。

(1) 呼格（Vocative）形の残存：P（⇔C：呼格の消失＞主格への合流）

a + 緩音化名詞/形容詞の呼格：

pv+ (lenited)n(voc.)

③ OIr. ..., a **Chonchobuir**?...-SMMD 6.7- (Conchobar? C.か?)

cf. ...ol **Conchobar**. -SMMD 6.5- (Conchobar.C.が言った)

(2) 総合的未来形（f未来形）の文法化：P.（⇔C：分析的未來形）

pv(neg.)+pn(acc.)+v(fut.)

③ OIr. Nis·rainn**fe** indossa -SMMD 12.2-

(あなたは今それ(=豚)を切り分けなさい)

(3) 総合的受動形（r-受動形）の文法化（分析的受動形の不在）：P

v(pass.) im+pn(acc.)

③ OIr. **Ēgthir** immum. -SMMD 10.8-

(私の周りに叫び声がするく？私の周りでは叫ばれている)

☞ “自律形 (saorbhriathar)” “自由動詞” と呼ばれる受動形を含む非人称受動文では、動作に焦点が当てられるため、叙事散文や旧訳聖書の歴史本など生き生きした散文スタイルとして頻用される。

(4) 非人称構文の汎用：P

pv+pn+v(prêt.) adv

③ OIr. Ros·lá i socht. -SMMD 9.2-

(彼らは沈黙に入ったくそれが彼らを沈黙状態に置いた)

(5) 動詞の関係詞形の存在と関係詞の不在：P（⇔C：疑問詞系の関係代名詞）

③ OIr. a mbás **tīagme**-ni (我々が至る死) =⑩

動詞関係詞形

(注) ※<sup>1</sup> 言語名の略称は、下記の通りで、以下それに準拠する。

ゴイデル語：ModIr.現代アイルランド語/OIr.古期アイルランド語

その他の言語：E.英語/F.フランス語/G.ドイツ語/R.ロシア語/Lat.ラテン語/

Gr.ギリシャ語/IE.印欧（祖）語

※<sup>2</sup> 引用資料の略号は、以下の通りである。

SMMD: SCÉLA MUCCE MEIC DATHÓ (the story of mac dathó's PIG)

Thureysen G.: Thurneysen's Old Irish Grammar

ML.:ミラン・グロース;Wb.:ヴェルツブルグ・グロース;Tur.:トゥリーニ・

グロース;SG.:聖ガル・グロース

※<sup>3</sup> 例文やテキスト本文中の文字上の点（´）は緩音を、文字直前の点（・）は直後の音節上に強勢が来ること、母音上のマクロン（¯）やアキュート（´）は長音

を、下線は比較対照部分を、☞ 記号は注記を、それぞれ示す。以下、同様。

※<sup>4</sup> Doi(1988)で試みられた *ML.GL* (ミラングロース) の詳細な文法的分析を指す。

※<sup>5</sup> Kurzová(1997)で提起された類型論。

#### 4. 結論

古期アイルランド語、特に4大グロースの諸例分析の結果、次の特徴が抽出された。全体的特徴としては、i. 分詞・不定詞の不在と動名詞の頻用、V(P)タイプ (O 接中代名詞では V-o (P)) の頻用、存在動詞 *a•tá* (ある) + 斜格タイプ所有構文の文法化、代名詞目的語による2種の抱合形式 (動詞内抱合と前置詞句内抱合/屈折前置詞) の存在、呼格形の残存、総合的未来形 (*f* 未来形) と総合的受動形 (*r*-受動形) の文法化、非人称構文の汎用、動詞関係詞形の存在と関係詞の不在、グロースの特徴としては、ii. 名詞文タイプで、繫辞 *is* + (前置詞 +) (動) 名詞等 (c) + 従属節 (s) (2要素述語判断/強調文) の汎用: 12/32 例、繫辞 *is* (V-S) + 名詞 (: 補語 c) (2要素述語属性文) および 前置詞句 + 関係節 (1要素無動詞文) の使用: 各 2/32 例、動詞文タイプで、動詞 (V) + 名詞 (S) + 名詞 (O) (3要素動詞行為文) の汎用: 14/32 例、抱合動詞 (接頭辞(pv)+接中代名詞(: 目的語 O)+動詞 v) V+名詞 (S) (3要素動詞抱合文) の多用: 4/32 例、動詞 (V) + 名詞(: 主語 S) (2要素動詞存在文) の使用: 1/32 例。

#### 参考文献:

Bičovský, J.(2005): *Úvod do vývoje Keltských jazyků (An Introduction to the Development of Celtic Languages)*, FF UK:Praha.

Doi, T. (1988): “The Structure of Old Irish —Syntactical and Typological—,” *Studia Celtica Japonica 1* (Eds. by T. Hirunuma et al.), The Celtic Society of Japan.

Doi, T.(1998): 「アイルランド語」「スコットランド・ゲール語」「島嶼ケルト語」『言語学大辞典セクション: ヨーロッパの言語』三省堂: 東京。

*Encyklopédia jazykovedy (Encyclopedia of Linguistic)*, Obzor:Bratislava, 1993.

Hirunuma, T.(1981): “The Characteristics of the Keltic Languages,” *Studia Celtica Japonica No.16* (Ed. by J. Yoshioka) , The Celtic Society of Japan

本城二郎 2015: 「ケルト語の諸特徴と類型—アイルランド語における音声的特徴と形態統語的特徴を中心として—」『ニダバ』第44号。

Kurzová, H.(1997): “Morphosyntactic processes in Europe,” *Proceedings of LP (Ed.by B. Palek)*, Charles University Press:Prague.

Lehmann, R.P.M. et al (1975): *An Introduction to Old Irish*, MLA:New York.

Russell, P.(1995): *An Introduction to the Celtic Languages*, Longman:London.

Thueneyesen, R.(1946): *A Grammar of Old Irish*, DIAS:Dublin.

Yoshioka, J.(1971): “On Celtic Languages (1)”, *Studia Celtica Japonica No1*.